Program

◆ 山本直純（1932-2002）

白銀の栄光
（1972年札幌オリンピック行進曲／管弦楽版）

交響譚詩 シンフォニック・バラード
I. Resonance
II. Romance
III. Rememberance
IV. Dance

── 休憩 Intermission ──

◆ ヨハン・シュトラウスII世／
山本直純編曲　常動曲

◆ 山本直純編纂
オーケストラのためのデモンストレーション
打楽器―楽器紹介
フルート／J.S.バッハ：
管弦楽組曲第2番 BWV1067より「バディネリ」
オーボエ／五木の子守唄
クラリネット／作曲者不詳：クラリネット・ポルカ
ファゴット／ゴセック：ガヴォット
ホルン／ウェーバー：狩人の合唱
トランペット／ビートルズ：オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ
トロンボーン／フォスター：夢見る人
テューバ／ワイルダー：
テューバとピアノのための組曲第1番《エフィ組曲》より
「エフィちゃんがダンスへ行く」
コントラバス／サン＝サーンス：組曲《動物の謝肉祭》より「象」
チェロ／サン＝サーンス：組曲《動物の謝肉祭》より「白鳥」
ヴィオラ／メンデルスゾーン：歌の翼に
ヴァイオリン／モンティ：チャルダッシュ
全員／滝廉太郎：荒城の月

◆ 1分間指揮者コーナー
ブラームス：ハンガリー舞曲第5番

◆ ドヴォルザーク／山本直純編曲
ユモレスク

映像協力：テレビマンユニオン「オーケストラがやって来た」
表紙イラスト：山藤章二
写真提供：ミリオンコンサート協会、湯浅照子

Program note

山本直純という破格の才能が新日本フィルと作り上げた奇跡

文／宮本 明（音楽ライター）

伝説の番組『オーケストラがやって来た』

本日の公演タイトル『オーケストラがやっと来た』は、往年のクラシック音楽番組『オーケストラがやって来た』（以下、『オケ来た』）のダジャレ。1972年10月から1983年3月まで、全544回（ほかにスペシャル版が1回）にわたってTBS系列の全国ネットで放送された伝説の番組だ。

レギュラー出演していたのが新日本フィルハーモニー交響楽団。番組と同じ1972年に発足し、放送開始の半月前に最初のコンサートを開いたばかりだった。

そして企画、司会、編曲、指揮とフル回転で大活躍したのが、本日の主役であり、今年生誕90年＆没後20年の山本直純だ。盟友・小澤征爾も日本に帰国するたびに準レギュラー的に出演し、ふたりが中心となって番組を盛り上げた。

「啓蒙」「芸術」「エンタメ」の3本の柱

『オケ来た』に、教育番組的な堅苦しさはまったくなかった。本日の指揮者、下野竜也いわく「ドリフターズみたい」。

番組には大きく3本の柱があった。「啓蒙」「芸術」「エンタテインメント」。それらがバランスよく押さえられていた。

まず、クラシック音楽を広く知ってもらうための「啓蒙」。オーケストラの楽器紹介や音楽用語の解説などレクチャー的な回も少なくなかったが、番組の本質とも言えるなによりの啓蒙は、47都道府県すべてを訪ねて公開収録していたことだろう。手元の集計では、全544回中、東京収録の回は154本。7割以上が東京以外での収録だったのだ。プロの音楽活動に今よりまだずっと大きな地域差があった当時、生のオーケストラを聴く機会を各地に提供したことの意義

は大きい。地方のファンにとってはまさに、自分の町に「オーケストラがやって来た」のだ。『オケ来た』には、超一流演奏家が次々に出演して、世界トップ・レベルの「芸術」を聴かせた。「えっ、こんな大物が日本のテレビに？」と驚くような巨匠たち。アイザック・スターン、イツァーク・パールマン、クリストフ・エッシェンバッハ、ルドルフ・ゼルキン等々。ベルリン・フィルの新旧コンサートマスター、ミシェル・シュヴァルベと安永徹がコンマス席に座って《英雄の生涯》を演奏したこともあった。視聴者はもちろん、オーケストラの楽員たちも大いに刺激を受けた。

そして、広くお茶の間の心を掴んだのは、ジャンルの垣根を越えた「エンタテインメント」な番組作りだった。たとえば、旬の歌謡スターたちがたびたび出演してクラシックに挑んだ。抜群の歌唱力で繰り返し出演した布施明、「アンコ椿姫」として田谷力三を相手にヴィオレッタを披露した都はるみ、すでに《津軽海峡冬景色》の大ヒットを飛ばしていた石川さゆりのケルビーノ。《襟裳岬》を歌った森進一は、小澤征爾の本気のアドバイスに、見るからに緊張していた。

天才・直純の本領発揮

小澤ら指揮者仲間をはじめ、彼に関わった人々が「本物の天才」と口を揃える山本直純の才能が、『オケ来た』でもっとも顕著に発現したのは、たぶん編曲だ。

たとえば番組テーマ曲の《常動曲》。ヨハン・シュトラウスII世の原曲を番組の尺に合わせて抜粋しているのだが、シュトラウスのスコアを微妙に編曲してある。聴きづらいところを聴きやすくしたり、音を足したり引いたり。結果として聴こえてくるのは直純の音だ。

番組の編曲はアシスタントを務めていた作曲家・青山勇らスタッフにも委ねながら数人のチームであたっていたが、直純自身の仕事ぶりも凄まじかった。

締切りに追われた綱渡りも珍しくない。直純がスコアを書き進めると、机の向こうに座った3人の写譜師が手分けして次々にパート譜を作成していく。逆から覗き込んで書き写す写譜師の職人技もすごいが、彼らの効率を考えて、旋律に沿ってではなく、音符をスコアの縦方向に書き込んでいく直純もすごい。脳の中に完璧に出来上がっているスコアを五線紙に書き写すだけ、という作業だったのだろう。

編曲が企画の進行とリンクしていることを窺わせる例が、現在、番組を制作していたテレビマンユニオンの動画サイトに公開されている。第3回放送の「オザワ・セイジの赤とんぼ」。30分の番組を、1コーラスわずか8小節の《赤とんぼ》（山田耕筰）だけで作るという冒険的な企画だ。小澤と直純が、オーケストラと合唱、そして客席を巻き込んで壮大な《赤とんぼ》を作り上げていく。クライマックスとなるのが、歌の終わり近く。客席が歌う「♪お（負）われて見たのは〜」で、原曲にないフェルマータがかかる。一見、小澤が即興的に止めているようにも見えるが、その部分の和音を聴けば、フェルマータを前提に編曲しているのは明らか。主調のE♭に対してCセブンス（サブドミナントのドミナント）。思いがけないところで止まっているような感じが出る。このあたりは編曲まかせだとは思うが、台本の進行と編曲とが互いに融通し合っているからこそ可能な構成だろう。

深夜まで及んだ毎回の企画会議

企画会議の様子はどんなだったのだろう。当時の制作スタッフの多くはすでに鬼籍に入っているが、番組初期にディレクターを務めていた黒木隆に話を聞くことができた。

「会議はいつも日付をまたいで深夜までやっていたよ。アイディアを出すのは直純。それに沿って構成作家の榛谷（はんがい）泰明さんも意見を出すけど、企画のベースはだいたい直純自身が考えたものだね」

ちなみに、黒木隆というのは「芸名」で、本名は岡山尚幹。当時フジテレビ社員で、のちに日本オーケストラ連盟事務局長なども務めた人物だ。本人の了解のもと、ここに記しておく。岡山は1959年のフジ開局以来ずっと、『日本フィル・シンフォニー・コンサート』のチーフ・ディレクターだった。

「オーケストラ番組を撮った経験のあるディレクターなんて、当時はいなかったからね。直純に呼ばれて、番組が軌道に乗るまでの1〜2年だけ手伝ったんだ。テレビマンユニオンの大原れい子ディレクターと半分ずつぐらい担当していたのかな」

50年前といえども他局の社員がライバル局の番組作りに参加することが正面切って認められていたはずがないだろうが、なんとなく許されていた時代だったという。

『オケ来た』がひろげたクラシックの裾野

直純が小澤に贈った「お前は世界に出ろ。オレは日本でクラシックの底辺を広げる」という言葉は有名だ。新日本フィル創設にあたって小澤とともに主導的な役割を果たした直純。指揮のテクニックも抜群で、さまざまなコンサートも指揮したが、こと定期演奏会に限って言えば、彼が指揮したのは1972年第3回定期のオール・ブラームス・プログラムだけだった。底辺、いや裾野を広げる役割に徹していた証だろう。

新日本フィルへの思いは人一倍だった。1970年代に某CMに出演（音楽も作曲）した際には、自身はノーギャラで、そのぶんをまるまる新日本フィルのステージ衣装購入に充てるのが条件だったという。また晩年まで、第三者に新日本フィルのことを話す時は必ず、「うちは」と一人称を使った。

1983年3月27日放送の『オケ来た』最終回は小澤征爾指揮のハイドン《告別》だった。曲の途中でオーケストラがだんだんいなくなるというおなじみの演出。やや意外なことに、楽員たちに「番組ロス」の喪失感はなく、むしろ晴れ晴れと番組終了を迎えていた。その中でただひとり、寂しそうに舞台を見つめていたのが山本直純だった。不世出の天才の頭の中には、人をあっと驚かせる卓抜なアイディアが、まだまだいっぱいに詰まっていたのかもしれない。

（文中敬称略）

この稿の執筆にあたり、主催者の声がけで以下の3氏にご足労いただき、当時の現場の様子を教えていただくことができた。元新日本フィル首席クラリネット奏者の鈴木良昭氏、同じくコントラバスの安保龍也氏。晩年まで長く山本直純氏の担当マネージャーだったミリオンコンサート協会の岩永直也氏。その折、話題のポイントをあらかじめ周到に整理して臨まれ、明るく深みのある声で丁寧に話してくださった安保氏が取材後に急逝された。ご冥福を、深くお祈り申し上げます。

＜曲目解説＞

白銀の栄光

1972年札幌オリンピックの入場行進曲。原曲は吹奏楽。8年前の1964年東京オリンピックで古関裕而が背負っていた「戦後」や「復興」はもはやなく、力みなく前に進む活力が晴れやかなサウンドをまとっている。日本中が日の丸飛行隊の金銀銅独占に酔い、銀盤の妖精ジャネット・リンの笑顔に夢中になった2月。閉幕してすぐにあさま山荘。5月に沖縄返還。そして7月1日には新日本フィルが誕生した、激動の年だ。

交響譚詩　シンフォニック・バラード

1983年、『オケ来た』番組終了に際して作曲。番組内で初演された。メンバーの顔を思い浮かべながら作曲したという直純は、全パートにもれなくスポットをあてる。「Resonance」で始まる、すべて“～ance”の付く4楽章。初演時には第1楽章の冒頭部分が「Chanceであい」と名付けられていたように、楽団創設以来の両者の交歓の歴史を綴ったバラード（譚詩＝叙事詩）だ。最後は番組のテーマ音楽が高らかに引用されて曲を閉じる。

常動曲（ヨハン・シュトラウスII世）

番組オープニング。終盤のホルンの旋律に合わせて客席が「♪オーケストラが～やって来た～」と歌って参加する。正直ちょっと無理矢理な歌詞のあて方なのに、「オケ来た世代」には、ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでこの曲を聴いても、もうこの歌詞にしか聴こえないという人も多いはず。原曲は1861年4月4日、エイプリル・フール直後に初演されたからか、「音楽の冗談」という副題付きで、無限にリピートする仕掛けになっている。

オーケストラのためのデモンストレーション

オーケストラの楽器を紹介する入門曲といえばプロコフィエフ《ピーターと狼》、ブリテン《青少年のための管弦楽入門》、サン＝サーンス《動物の謝肉祭》が御三家。それを直純流にやるとこうなる。バッハからビートルズまで、楽器ごとにさまざまな名曲が次々に登場する、まさにデモンストレーション。オーケストラ編曲の鮮やかなセンスにも息を飲む。直純自身が案内役を務めることが前提なので、指揮者のトーク力も問われそう。

ユモレスク（ドヴォルザーク）

原曲はピアノ曲。曲名は英語の「ユーモア」と同じ語源だが、滑稽とか面白いとかのニュアンスはなく、「さまざまな性格の小品集」ぐらいの意味。そこに直純がにやりと笑って滑り込ませた「ユーモア」がフォスター《故郷の人々（スワニー河）》の同時演奏（クオドリベット）。自筆譜を見ると、一度《ユモレスク》だけで普通に完成したスコアの余白に、おそらくあとで閃いたのだろう、フォスターを別の太さのペンで書き加えている。